

という思いで、頭がいっぱいになっていた。

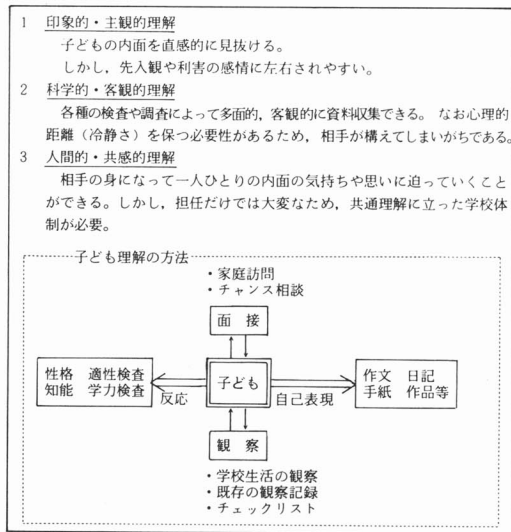
T先生はA男に対するあまりの理解の甘さと資料不足に気づき、これからの指導援助に焦りを感じていた。

そこで、思い切ってA男の今の状態をこの会で話すことにした。

## A男の理解

その後で、「子ども理解の仕方」(表3)について確認し、A男について話し合った。

表3 子ども理解



### 【資料の収集】

<本人> 学力は中の上位にあたる(4年時)幼児期(4~5才)に夜尿が目立つ。小さい頃から「手の掛からない良い子」。自分と似たおとなしい子と家の中で遊ぶ。真面目で努力する子。

<父> 真面目な会社員。本人が5~6才の時単身赴任。頑固で怒ると怖い。娘とはよく遊ぶが、本人との遊びは少ない。

<母> 専業主婦で子どものことになると口うるさい。近所との付き合いは少ない。

<妹> 小学3年生。我がままで甘えん坊。活発な性格。

### 【診断】

小さい頃から両親の愛情を十分に得られず、両親との会話も少なく、おとなしい性格が形成された。また、室内での遊びが多く、同級生と遊ぶ経験も少なかった。そのため、協調性に欠け、上手な人間関係が取れない。さらに、自己中心的で、自分の思うようにいかないと閉じ込めてしまう。

やがて学年が進むにしたがって、自分の思うことが言えないまま人間関係につまずきを感じ、強い焦りと不安を抱くようになり、学校に行くのがつらく不登校になった。

### 【指導援助の方向性】

- 今までは、問題行動を持つ子どもを「やっかい者」「不適応児童」等ととらえがちだったが「A男は『不登校』という形で、自分の発達課題である自発性・自立性を獲得しようとしているのだ」ととらえ、登校刺激を与えないで、不登校状態を指導・援助していく中で、自我の発達を図っていく。
- A男は自尊感情をなくし、自分の行動に自信をなくしているために、自分の存在価値を見いだせないでいる。そこで、認め、ほめるという肯定的かかわりで、自発的なエネルギーを高めていく。

### 段階的な指導援助

**心の解放を** T先生はA男が身体的症状を訴えているということで、まずは登校刺激を一切やめ、無理して登校する必要のないことを本人や親に電話で伝えた。